石川啄木

◉わが人生観◉

悲しき生の果て

苦悩する青春の絶唱——
痛ましく悲しい心の軌跡

あふれる才気を、
沈潜せる心の痛みを、
苦き生活(くらし)の思いを、望郷の想いを、
やらんかたなき世への怒りを、
孤独なる漂泊のうち
三行の抒情に、革命の情熱に表出し、
報われぬまま逝った天才・啄木。
——若く悲しい生涯の心の軌跡。

大和出版

悲しき生の果て
—わが人生観5—

一九六九年三月三一日　初版発行
一九七七年一〇月三一日　一四刷発行

著者　石川啄木
発行者　大和たか
発行所　株式会社　大和出版
東京都豊島区要町一～四三
郵便番号　一七一
電話　東京　九七四—五五七一
振替　東京七—一八二七三六

（乱丁・落丁のものは、お取替えいたします）

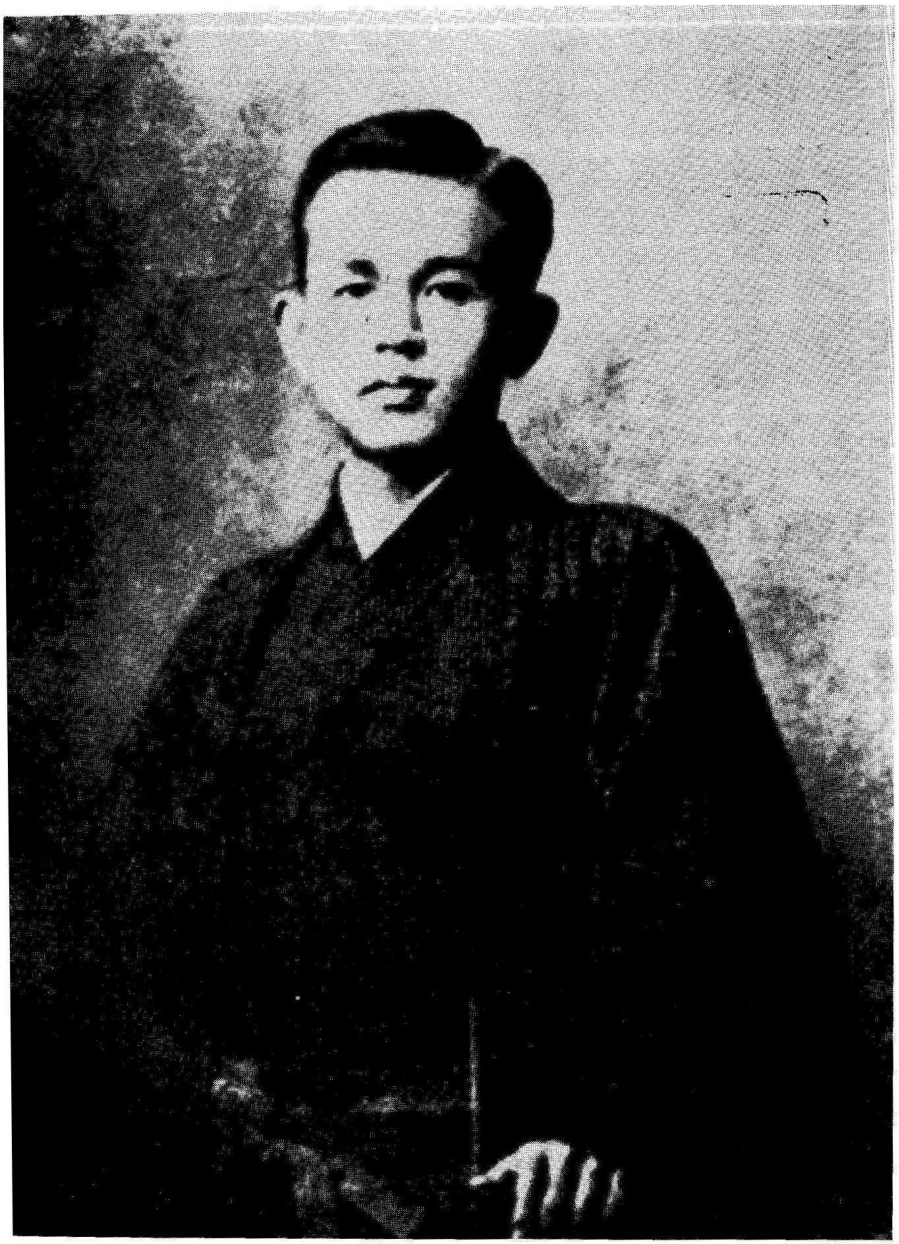
印刷・東光印刷　製本・誠幸堂
Printed in Japan.
0395-000052-4452

石川啄木

悲しき生の果て

◉わが人生観◉

大和出版



明治41年

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

①

夜あそく何夢やらの室の蹇かしまは
人や死まをらむと、
息をひそむる。

②

[illegible]

脈さぐる看護婦の手あ
[illegible]

あをあをと日あり
つめたく堅き日しあり

③

病院に入りて初めての
すぐ寝入りしが、
物足らぬかな。

一とうに
物を

④

何となく自分をえらい人のやうに
思ひてゐる、たりき。
おゝと昔かな。子供なりしかな。

目

次

人間について

人間の悲哀　13
人と人との深い信頼　14
真理追求への長い道　20
ひとり、自己を見つめる時　34

人生について

人生、この広大な器　45
空しさの中から　55
生き甲斐はどこに　57
燃えあがる青春の夢　59

死について

死　89
悲しき思い出　90

絶望とのたたかい　96
生きようとする力　101

人と自然

目覚めゆく魂　111
矛盾の中に息づく田園思慕　146
求めつづける心　150

詩・歌といのち

一利己主義者と友人との対話　163
心にのこる言葉　176
自己を語る真実の姿　178
食うべき詩　189
真実、未来に求める唯一の道　204

生活雑感

嗜　好　223
きれぎれに心に浮んだ感じと回想　224
心をかすめる生活のにがさ　239
信念をもつということ　242

解　説　尾崎秀樹　249
――啄木との出会い――

悲しき生の果て

—わが人生観

石川啄木

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

人間について

高きより飛び下りるごとき心もて
この一生を
終るすべなきか

人間の悲哀

人間の悲哀とは、自己の範囲を知ることである。生れ落ちた時、私は何も知らなかった。その時、何の悲しみがあったろう。経験と教育は日一日と私の、自己及び自己以外の事物に関する知識を広くし、深くした。——私は日一日と、自己の範囲というものを一画一画知ってゆくようになった。何の自由、何の領土が人間にある？　自己の範囲というものは、知れば知る程小さくなってゆく、動きのとれぬものになってゆく。

常に何らかの努力をせねばならぬ人間の運命を、私はしみじみと痛ましく思う。

人と人との深い信頼

ヴォルガ河岸のサラトフという所で、汽船アレクサンダア二世号が出帆しようとしていた時のことだ。客は恐ろしくこんでいた。一二等の切符はすっかり売切れてしまって、三等室にもリンゴ一つ落すほどの隙がなく、客は皆重なり合うようにして坐った。汽笛の鳴ってからであったが、船の副長があわただしく三等客の中をおしわけてきて、今しがた金を盗まれたといって訴えた一人の百姓の傍に立った。

『ああ旦那、金はもう見っかりましただあよ』と彼はいった。

『どこにあった?』

『そこにいる軍人の外套からだに。私いそうだんべと思って探したら、たしかにはあ四十一ルーブルと二十コペエクありましただあ』言いながら百姓は、分捕品ででもあるかのように羚羊の皮の財布を振り廻した。

『その軍人てのはどれだ！』
『それそこに寝てるだあ』
『よし、それじゃあそいつを警察に渡さなくちゃならん』
『警察に渡すね？　なぜ警察に渡すだね？　南無阿弥陀仏、止して御座らっしゃい。こいつに手をつけるでねえだよ。黙って寝かしておきなせえ』そして、飾り気のない、柔しい調子で付け加えた。『たしかに金ははあ見つかっただもの。皆ここにあるだ。それをはあこの上何がいるだね？』

そうしてこの事件は終った。

右は教授パウル・ミルヨウコフ氏がかつてシカゴ大学の聘に応じて講演し、後同大学から出版された講演草稿『ロシアとその危機』中、教授自らの属する国民――ロシア人の性格を論じたくだりに引用した、一外国旅行家の記述の一節である。

明治四十三年五月下旬、私は東京市内の電車の中で、次のような事実を目撃した。――雨あがりの日の午前のことである。品川行の一電車が上野広小路の停留場を過ぎて間もなく、乗合の一人なる婦人――誰の目にも上流社会の人と見えるような服装をした、しかしながらその挙止と顔貌とにあらわれた表情の決して上品でない、四十ぐらいの一婦人が、一枚の乗換切符を車掌に示

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com